

## 《教育長メッセージ 第21号》

### 『人権意識』

人権意識という言葉は、深く、容易に語れることではありませんが、私の子どもの頃の経験として、二つのエピソードを紹介します。

一つは、私の父親の言動です。

子どもの頃、勉強しない私に、父は「文康、ちゃんと勉強すねど、あんな仕事すかできねど。」とゴミや屎尿を集める人を見て言っていました。私はその言葉で勉強をしようとは思いませんでしたが、職業に対する差別意識を知らず知らずのうちに思い込まれていました。父は、そんな深い意味もなく、私の努力を促すために言ったのでしょうけれど、昭和30年代の日本には、社会全体にそのような差別感が漂っていました。



私は、その後、たまたま、友だちのお父さんが、私の父の言う職業に従事していて、友だちの家によく遊びに行き、友だちのお父さんとも話をし、そのことが真実ではないことがわかりました。

もう一つは、今でも思い出すとひどく後悔するエピソードです。

小学校3年生でした。夏休みに母の実家に行って、いどこに集会所に連れて行かれて、宿題をやった時のことです。その当時は、ズボンにつきはぎがあるのは普通のことでした。しかし、その子を見るからに服装がみすぼらしく、誰かがいざこぎの中で「ボロ」「ボロ」と囃（はや）し立てました。他の子も一斉に囃し立て、意味も分からず私も声を発しました。

私は、その子と一瞬、目が合いました。その怒りというより悲しい目が突き刺さってきました。私は、思わず押し黙りました。囃し立てる声は次第に収まりましたが、私は、してはいけないことをしてしまったと思いました。初めて、人を悲しませることは言ってはいけないと、子どもながらに感じました。

その後も、私は失敗を繰り返していますが、その度に、その時のことを思い出します。

人権は、ひとりひとりの命を敬い、思いやり、認め、大切にすることなのでしょう。

しかしながら、自分本位で判断したり、調子に乗って配慮を欠いたり、面白おかしく表現したりする中で、失敗することが多々あります。人を悲しませたり、傷つけたりすることがあります。

後悔することがあります。

純粋な子どもたちは、環境により良くも悪くも変容します。

家族や教員や地域の方など、子どもたちにかかわる大人の人権意識が子どもの心の成長を大きく左右します。

例えば、子どものいじめの問題の解決には、子どもにかかわる大人の人権意識の高まり、社会全体の人権意識の高まりが鍵を握っていると考えています。

私たち大人が、やさしくなりましょう。

子どもの頃の経験をふまえ、私なりにあれこれ思い、考えて、今は、そのように思うようになりました。

まだまだ、失敗を繰り返し、成長の途中ですが。

次回は、「親のわがまま」について取り上げてみたいと思います。